

称号及び氏名 博士(看護学) 山内 加絵

学位授与の日付 平成28年9月25日

論文名 「ユニット型特別養護老人ホームの看護職に向けた看取りにおける  
介護職との連携実践尺度の開発」

論文審査委員 主査 長畑 多代  
副査 上野 昌江  
副査 細田 泰子

## 論文内容の要旨

### 【目的】

超高齢社会を背景に、特別養護老人ホーム（以下、特養）における看取りが推進されている。中でも少人数で生活し、なじみの介護職がケアにあたるなど、家庭的な雰囲気の中で生活することができるユニット型特別養護老人ホーム（以下、ユニット型特養）が注目されている。入居者の体調が不安定になる看取りにおいて、看護職が各ユニットの介護職といかに連携を図るかが重要な課題である。そこで本研究では、ユニット型特養の看取りにおいて、看護職が介護職との連携の実践を自己評価できる尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

### 【尺度原案の作成】

尺度の開発は以下のプロセスで進めた。

#### 1. 予備研究1：ユニット型特養の看取りにおける看護・介護職の連携体制の実態

1) 方法：ユニット型特養の看護・介護職を研究参加者として、フォーカスグループインタビューを行った。

2) 結果：ユニット型特養の看取りにおける看護・介護職の連携体制には、看取りの方針を検討するユニットリーダー介護職との連携と、入居者の体調に応じてその日のケアを検討するユニット担当介護職との連携の2つの体制が明らかとなった。

#### 2. 予備研究2：ユニット型特養の看取りにおける看護・介護職の連携内容の明確化

1) 方法：ユニット型特養の看護・介護職を研究参加者として、個別面接調査を行った。ユニット型特養の看取りにおいて、これまでの経験から看護職と介護職の連携がうまくいったと感じている事例に基づいて、その具体的な連携の内容を語ってもらった。

2)結果：看護職は5カテゴリ9サブカテゴリ36項目、介護職は5カテゴリ9サブカテゴリ25項目を抽出した。

**3. 尺度原案の作成：**予備研究2で得られた連携の実践について、看護・介護職それぞれの連携の実践内容を照らし合わせ、看護・介護職の実践が同じ内容を示している項目はひとつの項目とし、介護職のみが語った連携の実践内容は看護職が実践すべき連携として抽出し、予備研究1で得られたユニット型特養の連携体制を反映させて尺度項目を作成した。構成概念については、予備研究2で抽出したカテゴリを下位概念とし、＜情報の共有＞＜目標の合意＞＜専門性を活かした協力活動＞＜評価の共有＞＜関係性の構築＞の5下位概念、44項目の原案を作成した。

### 【尺度の信頼性・妥当性の検討】

#### 1. 本研究1：尺度原案の表面妥当性と内容妥当性の検討

1)方法：ユニット型特養の常勤看護師および老年看護学研究者を対象に自記式質問紙調査を行った。内容妥当性は、Item-Content Validity Index (以下、I-CVI) の算出、表面妥当性は、質問項目と概念の関連、表現の適切性、項目の重複や不足を検討した。

2)結果：I-CVIが0.8未満であった3項目を削除した。また17項目の表現を修正し、さらに必要である内容を7項目加え、5下位概念、48項目で構成される尺度を作成した。

#### 2. 本研究2：尺度の信頼性・妥当性の検討

1)方法：全国のユニット型特養の看護職を対象に自記式質問紙調査を行い、項目分析、構成概念妥当性の検討、内的整合性の検討、基準関連妥当性の検討、安定性の検討を行った。

2)結果：回答を得た378名(回収率76.8%)のうち、有効回答373名(有効回答率98.7%)を分析対象とした。項目分析、因子分析、内的整合性の検討による項目の検討を行い、2項目を削除した。46項目に対して因子分析を行い、【医療職として介護職を支える】【ユニットの介護職を尊重し関係性を構築する】【ユニットで看取ることを合意し評価する】【緊急時の連携体制を整備する】【看取りに向かう身体的特徴を共有する】【ユニットの特徴を活かして情報を共有する】の6因子37項目で構成される尺度を作成した。内的整合性は、Cronbach's  $\alpha$  係数が尺度全体で0.967、各因子で0.784~0.936であった。基準関連妥当性は、学際的チームアプローチ実践評価尺度(以下、ITA評価尺度)との相関係数は $\rho = 0.460 \sim 0.714$ 、チーム特性チェックリストとの相関係数は $\rho = 0.388 \sim 0.660$ の範囲でいずれも有意な相関を示した( $p < 0.01$ )。安定性は、287名(回収率58.3%)の回答に基づく再テスト法を行い、1回目と2回目の合計得点の間で $\rho = 0.803$ 、各因子では $\rho = 0.620 \sim 0.717$ の有意な相関がみられた( $p < 0.01$ )。いずれの調査も大阪府立大学看護学研究倫理委員会にて承認を得て実施した。

### 【考察】

本尺度はCronbach's  $\alpha$  係数が高いことより、内的整合性、安定性が確保されたといえる。

また因子分析により構成概念妥当性が確認された。基準関連妥当性においても本尺度と ITA 評価尺度、チーム特性チェックリストとの有意な相関が認められた。これらのことより本尺度の信頼性・妥当性は確保されたといえる。本尺度は介護職の視点を包含しているため、看護職が介護職と連携する上で必要な項目が網羅されているといえる。さらに全国のユニット型特養に調査したことより、地域の偏りはなく汎用性の高い尺度であるといえる。本尺度は看護職が介護職との連携における実践を自己評価するためのツールとして活用できる。自らの実践を振り返ることで連携への意識が高まるなど、ユニット型特養における看取りの質の向上に寄与することができると思う。

## 学位論文審査結果の要旨

本研究は、ユニット型特別養護老人ホーム（以下、ユニット型特養）での看取りにおいて必要不可欠な看護と介護の連携に焦点をあて、看護職が介護職との連携の実践を自己評価するための尺度の開発を目的としている。超高齢社会を背景に、住み慣れた施設での看取りのニーズが高まることから、看取りケアの質向上に向けた課題を明らかにし、専門職への支援体制のあり方を検討するためにも、ユニット型特養の連携体制の特徴を踏まえた評価ツールの開発は、独創性の高い意義のある研究課題である。

連携実践尺度の開発は、尺度原案の作成、尺度原案の表面妥当性と内容妥当性の検証、尺度の信頼性・妥当性の検証の3段階のプロセスを経て行われた。まず看護職及び介護職へのフォーカスグループインタビューより、ユニット型特養における看護職と介護職の連携体制の特徴を見いだした。さらに、看取りにおける具体的な連携の実践内容について、看護職及び介護職 17 名への個別面接調査を行い、双方が語った連携の内容から、ユニット型特養のケア体制に応じた看護職の連携実践として、尺度項目原案を作成した。次に、ユニット型特養での熟練看護師と老年看護学研究者を対象とする自記式質問紙調査により、内容妥当性指数の算出、表現の適切性、項目の重複や不足など、尺度項目の表面妥当性および内容妥当性の検討を行った。そして、全国のユニット型特養の看護職を対象とする質問紙調査を実施し、有効回答が得られた 373 名を分析対象とし、項目分析および探索的因子分析を行った結果【医療職として介護職を支える】【ユニットの介護職を尊重し関係性を構築する】【ユニットで看取ることを合意し評価する】【緊急時の連携体制を整備する】【看取りに向かう身体的特徴を共有する】【ユニットの特徴を活かして情報を共有する】の6因子 37 項目で構成される尺度を作成し、内的整合性と安定性による信頼性、構成概念妥当性および基準関連妥当性が確認された。

本研究では、評価が難しい看取りケアにおける介護職との連携について、介護職の視点を取り入れつつ看護職の自己評価のための実践尺度として、測定尺度開発のプロセスに沿った作成がなされていた。尺度の因子構造全体および各項目において、ユニット型特養における看取りの実際や看護職と介護職の連携の特徴が、どのように反映されているのかについては説明が不十分な点があるものの、連携の具体的な実践内容を評価する上で適用可能性の高い尺度であると考えられ、ユニット型特養の看取りケアの質の向上への貢献が期待される一定の成果が得られたといえる。

以上のことから、本論文は老年看護学における実践・研究の発展に寄与する学術的価値を有しており、博士（看護学）の学位を授与するに値するものと認める。